

日本の中学校英語科における辞書引き学習実践 —石垣市立 I 中学校の場合—

深谷 圭助* 吉川 龍生** 王 林鋒*** 関山 健治****
高原 かおる***** 赤嶺 祥子***** 仲山 恵美子***** 西原 啓世*****

The Research on the Practice of Jishobiki “Lexplore” in English Language Studies at Japanese Junior High Schools: The Case Study of I Junior High School at Ishigaki

FUKAYA Keisuke YOSHIKAWA Tatsuo WANG Linfeng SEKIYAMA Kenji
TAKAHARA Kaoru AKAMINE Shoko NAKAYAMA Emiko NISHIHARA Hiroyo

要 約

本研究では、ヨーロッパ言語共通参照枠（以下、CEFRと略記）における複言語・複文化主義に基づく汎用的な学習モデルを構築するために、日本の中学校の英語教育で辞書引き学習モデルの実践と効果分析を行うことを目的としている。

日本では、2017年3月の学習指導要領改訂により、初等教育からの英語教育が本格的に始まった。その一方で、日本語も含む学習者の言語学習に対する動機づけや学習方略の問題は教育現場の課題として残されたままである。CEFRの日本の外国語教育への受容は評価枠組の点に偏したものであり、CEFRの理念である複言語・複文化主義において重視されている個人の中の言語間の往還、架橋の問題は問題にされておらず、それぞれの言語における言語運用能力水準にしか関心がないのではないと思われる¹⁾。

本研究では、複言語学習において国や言語を超えた汎用的言語学習方略モデルとして期待される「辞書引き学習」の、学習者に対する語彙学習への動機づけと学習方略の有効性について、一定期間の実践導入を通して明らかにする。また、CEFRの中核的な考え方である「言語学習における自律学習モデルの確立を複言語学習において行う」という課題に対する最適解を探究するためには乗り越えなければならない「壁」がある。それは、学習方略モデルの導入が外国語教育担当教師の授業におけるねらいを達成するものでなければならないということである。そのために中学校英語教育において同モデルを実験的に導入することで、語彙の理解に効果があるかを示す必要がある。具体的には、実験群と統制群を設定し、語彙検定を実施し分析を行う。

本稿は、日本の中学校の英語教育における自律学習モデルとしての汎用的言語学習方略モデルの実践とその語彙力向上に対する効果について検証するものである。

キーワード：辞書引き学習、英語教育、中学校、複言語学習、学習方略、自律学習、語彙検定

* 中部大学現代教育学部現代教育学科
** 慶応義塾大学経済学部
*** 大阪教育大学大学院連合教職実践研究科
**** 中部大学人間創生教育院
***** 石垣市教育委員会
***** 豊見城市立伊良波中学校
***** 石垣市立石垣中学校
***** 石垣市立石垣第二中学校

1. はじめに

本稿では、ヨーロッパ言語共通参照枠（以下、CEFRと略記）が唱導する複言語・複文化主義に基

づく国や言語種を超えた汎用的な学習モデルを構築するために、日本の中学校における第二言語(英語)教育において「辞書引き学習」モデルの実践・検証を行う。同モデルは、メタ語彙能力向上に資する語彙学習モデルとしても期待される。

本研究に関連して、日本の高等学校の第三言語(中国語)教育において「辞書引き学習」の実践・検証が行われており、その研究成果は、Yoshikawa, T, Fukaya, K (2023) *A supplemental package of vocabulary teaching tools for improving autonomous learning and metacognitive abilities in Chinese language education: Integrating paper dictionaries and digital technology*, BCLTS Annual International Conference, at the University of Edinburgh, 29th June 2023、吉川龍生、荻野友範、深谷圭助「高等学校での実践データに基づく中国語「辞書引き学習」導入パッケージ」『中国語教育学会第21回全国大会予稿集』中国語教育学会第21回全国大会(東海大学湘南キャンパス)2023年6月4日、20-24ページ。荻野友範、吉川龍生、深谷圭助「高等学校の中国語授業における辞書引き学習導入実践—紙の辞書とオンラインツール活用の取り組み」慶應義塾大学外国語教育研究センター『慶應義塾外国語教育研究』(第18号、2021年、pp42-66)で明らかにしている。また、イギリスの小学校の第一言語(英語)教育における「辞書引き学習」の実践・検証の研究成果は、深谷圭助、吉川龍生、関山健治「イギリスの公立小学校における辞書引き学習の導入と教師の学び」中部大学現代教育学部『現代教育学部紀要』第14号、2022年、pp27-35)、深谷圭助、吉川龍生、王林鋒、関山健治「イギリスの小学校英語教育におけるJB(辞書引き学習)モデル導入事例に関する考察」日本外国語教育推進機構『複言語・多言語教育研究』(第8巻、2020年、pp151-160)や、深谷圭助、吉川龍生「語彙習得学習における語種間共通方略モデルの開発とその実践—辞書引き学習の動機づけと方略の有効性をめぐって—」『現代教育学部紀要』(第12号、2020年、pp47-55)、深谷圭助「子供と言葉の出会いに関する国際比較研究—イギリスと日本における『辞書引き学習』の導入事例を中心に—」(『現代教育学部紀要』第10号、2018年、pp47-59)等において明らかにしている。本稿では、

日本の中学校の第二言語(英語)教育における辞書引き学習導入事例として、2022年度に沖縄県石垣市立I中学校1年生の英語授業で実施した生徒のメタ語彙能力向上に資する自律学習モデルとして期待される「辞書引き学習」の実践成果を明らかにする。

2. 研究の背景と研究の概要

グローバル社会が進む中で、外国語教育の挺入れの必要を迫られた日本において、小学校からの英語教育が本格的に始まっている。その一方で、日本語も含む学習者の言語学習に対する動機づけや学習方略の問題は教育現場の課題として残されたままであり、本研究はこうした課題を克服するものである。本研究は、複言語学習において国や言語を超えた言語間共通学習方略モデルとして期待される辞書引き学習の言語学習者に対する動機づけと学習方略の有効性について、本稿では、特に日本の英語教育における自律学習モデルとして期待される辞書引き学習モデルの実践成果を検討する。

テキストの文脈にある単語の意味を調べる通常の辞書の使い方と異なり、辞書引き学習では、辞書から既知の単語を見つけ、複数の意味や成り立ち、用例を包括的に読む。このことで、日本語と英語の間の語義や用法を言語知識と経験に照らし合わせながら、その語の意味や成り立ち等の異同について検討する。このことは、榎本剛士が論じた、「複言語・複文化主義では、言語や文化を心の中の別々の部屋にしまっておくのではなく、すべての言語知識と経験が寄与しながら、言語同士が関係を築き、また相互に作用し合っている統合された新しいコミュニケーション能力を作り上げる²⁾」とのCEFRにおける複言語・複文化主義の考え方に合致する。

これまでの日本の英語教育では、教える側のカリキュラムやテキストの引力が強く、辞書の使い方もテキストの文脈に沿った単語の意味を調べるものが主流であった。テキストの文脈に沿わない語釈や用例はノイズとして処理されがちであった。辞書引き学習は、テキストに依らず、辞書の中から生徒の既知語を見つけて読むため、生徒の英単語理解実態に即して学習が展開される。当該の英単語が、対応する日本語の語釈と併せてその単語に関わる言語知識

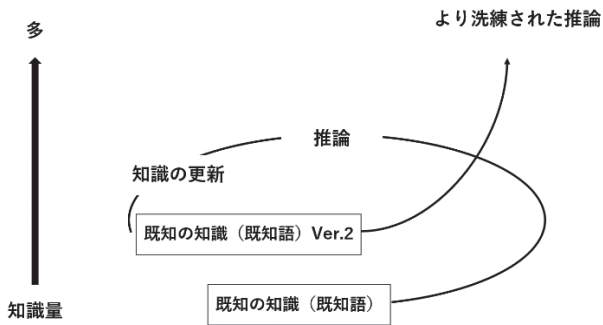


図1 ブートストラッピング・サイクルモデル（単語理解）

と経験を寄与させながら理解を進めるため、言語同士が新しい関係を築き、言語と文化が統合された新しいコミュニケーション能力を作り上げるのである。

また、通常の辞書引きは、テキストにある未知語を辞書で調べ、テキストの文脈に則して適切と思われる語釈や用法を選択してテキストを理解するために行う。それに対して、辞書引き学習では既知語に着目し、既知語を辞書から見つけ出して語釈や用例を読むことで、既存の知識が更新され、より洗練された単語解釈の推論ができるようになる。この考え方は、今井むつみ・秋田喜美による言語取得の理論モデル「ブートストラッピング・サイクル」と重なるものである³⁾。本稿では、日本の中学校における英語教育において、辞書引き学習を導入することにより既知の知識から学習を始め、英語と日本語を相互に比較することで、メタ語彙能力獲得のための学習動機付けと自律的な学習方略を得ることを目指す。

3. 石垣市立I中学校における辞書引き学習モデルの実践の概要

本研究では小学校における辞書引き学習導入の実績がある沖縄県石垣市教育委員会に中学校での実践導入の依頼をし、実験群としてI中学校、統制群としてO中学校の協力を得た。

(1) 2021（令和3）年7月～：授業内での帯活動として辞書引き学習

2021（令和3）年7月以降、授業内（最初の10分程度）で辞書引きを実施した。夏休みには、辞書を自宅へ持ち帰らせ、各自で辞書引きを実施させた。

(2) 2021（令和3）年10月：研究チームの訪問と、6クラスへ特設授業

深谷圭助、吉川龍生、王林鋒がそれぞれ2クラスずつを担当し、辞書引き学習の目的、辞書引きの進め方を確認し、実際に辞書引きを進めた。グループに分かれ、辞書の中から知っている英単語を探す活動では、「これまで知らなかった意味を持つ単語」や「ややこしいスペルの単語」などを探しながら、単語に関する気づきを見つめる場面があった。グループごとに割り当てられたアルファベットから始まる英単語を辞書から見つけ、選んだ単語のスペルと意味、その単語を選んだ説明を交えて発表を行った。「発表の様子」授業の終末には、単語の仕組みについてそれぞれの研究チーム担当者より説明をした。“re-”や“im-”等の接頭辞を知ること、より単語が覚えやすくなるヒントとなった。

- ・Boardは「板」という意味があるけど、on boardになると「飛行機に乗っている」という意味になる。
- ・ほうれんそうとわさびの名前に驚いた。
- ・温泉はhot springで直訳すぎて面白かった。hot lineというのは、直訳すると「熱い線」だけど、そこから「緊急連絡」という言い方になっていておもしろいと思う。
- ・zig-zagは日本語でも「ジグザグ」だったので面白かった。英語から日本語になったのか、日本語から英語になったのか気になった。
- ・今日は初めてナマコが「sea cucumber（海のきゅうり）」と書くのを知っておもしろかった。また、前より多く調べられてよかった。
- ・今日は4枚しか付箋をつけられなかったです。その中で印象に残ったのは、soreという単語で「ずきずき痛む」という意味がおもしろかった。
- ・くじらは「ほえる」だと思ってたけど、「ウェール」だったのが意外だ。
- ・本立てはずっと「ブックスタンド」だと思っていたけど、英語では「ブックエンド」だったのでおもしろいと思った。
- ・measureは「寸法、大きさ」の意味のほかに「手段」「処置」という意味があると知った。
- ・ETが「地球外生命体」という意味だとわかった。
- ・Koreaは「朝鮮」も「韓国」もどちらの意味もあった。発音は「クリア」だった。

- ・nurseryは「保育園」だと知っていたけど、「苗床」という意味があった。「保育園」と「苗床」は全然違うのに結びついておもしろかった。
- ・runにはたくさんの意味があった。「走る」「流れる」「運転する」「経営する」「立候補する」「続く」「～の状態になる」こんなにあってびっくりした。
- ・endという語は「終わり、最後」のほかに「末端、端、つきあたり」「終了、消滅、死」そして「目的」という意味もあった。
- ・コケコッコーはcock-a-doodle-dooと言って、「カッカドゥードゥールドゥー」と発音することがわかった。にわたりの鳴き方が国によって違うのか、と思った。
- ・ハロウィンのときのかぼちゃの名前はjack-o'lanternで「ジャカからあンタ（～）ン」と読むことがわかった。
- ・crayfishはザリガニ。ザリガニなのに「フィッシュ」が入ってるのがおもしろいと思った。

(3) 2021（令和3）年10-11月：英語語彙検定実施（1回目）

授業内にて、第1回英語語彙検定を実施した。統制群として。近隣の同規模校である石垣市立O中学校1学年4クラスに対しても、同じ英単語検定を依頼し、実施した。

(4) 2022年（令和4）年3月 英語語彙検定実施（2回目）及び、辞書引き学習インタビュー実施

授業内にて、第1回英語語彙検定を実施した。統制群として。近隣の同規模校である石垣市立O中学校1学年4クラスに対しても、同じ英単語検定を依頼し、実施した。また、数日間に亘って辞書引き学習に関するインタビューを行った。以下、生徒のコメントである。

- ・今までは、分からない単語があったら放置していたけど、今は英単語に興味を持ち、調べられるようになりました。これからも辞書引きに取り組みたいです。理由は人から意味を聞くよりも、自分で調べたほうが楽しく学べるからです。
- ・今まで覚えてなかった単語も覚えられて英検4級も合格できたし、英語に対して興味を持つことが

できました。辞書引きはこれからも取り組みたいと思います、なぜかというともだまだ全然分からない単語がたくさんあるから、それら全てを調べたいと思ったからです。

- ・今までは辞書を持ってなかったから分からない単語があっても調べなかった。でも、辞書を初めて使って自分で調べてみるということをする、頭に定着するし、とても覚えやすいし、調べる習慣がつく。その単語の意味だけでなく、〇〇と〇〇が合わさって、〇〇などの単語になるみたいな丸暗記させないようなことが書いてあってとても覚えやすい。
- ・辞書引き学習に取り組む前は、すぐスマホの翻訳アプリなどに頼りがちでしたが、辞書引き学習に取り組んだ後は、自らわからない単語を調べることが楽しいと感じるようになりました。1つの単語にいろいろな意味があることに改めて気づきました。例えば、gapという単語にはただギャップという意味だけでなく、割れ目という意味もあることを知りました。
- ・付せんが増えていくので、自分の成長が可視化できていいと思いました。

(5) 2022（令和4）年4月：授業内でJB Tournamentを実施

生徒たちは、第2学年に進級し、赤嶺祥子（1～4組担当）と西原啓世（5～6組担当）が昨年度に引き続き、辞書引き学習を進めた。本研究プロジェクト同人の新潟市立石山中学校教諭武石裕子の実践“JB Tournament”を元に、Round1は「野菜に関する単語」、Round2は「国に関する単語」と設定し、グループ対抗で実施した。以下は、辞書引き日記より生徒のコメントである。

- ・外国という短い単語でも英語にすると、とても長くて正直おどろいた。foreign country
- ・同じスペルでまったく違う意味の言葉があった。意外とフルーツが見つからなくておどろいた。くりやアボカドが果物ということが知れてよかった。
- ・白菜がチャイニーズキャベツでびっくりしました。ナスなのにエッグが入っていてなんでだろうと思いました。

(6) 2022（令和4）年6月～：授業内でJB Tournamentを実施

各単元末に「アルファベット」や「スペルが長単語」等のテーマを与える等して、数回実施しました。

以下は、辞書引き日記の生徒のコメントである。

- ・ *member, memory, men, mercy, mermaid, message, metronome, microscope, Ken has a good memory.*
- ・ *diamond*（ダイヤモンド）*down*（ダウン）*earphone*（イヤホン）など、日常的に使っている言葉が多い。
- ・ *letter*（レター）*lover*（ラバー）、*lover*は恋人などの意味だけだと思っていたけど、愛好家という意味もあると分かった。
- ・ 今日「旅」という単語に興味を持った。*trip*や*travel, voyage*など形が違うけど意味は同じものもあると分かった。
- ・ 付せん10枚中、2枚、季節の単語に出会った。夏「*summer*」冬「*winter*」。私が知っていた意味とは違う意味はなかった。
- ・ *selecion*（選択）がセレクションじゃなくて、セレクションと読むことが分かった。像のことを*statue*ということが分かった。*pinch*には、はさむなどの意味もあることが分かった。
- ・ *bitter*にはにがい、ひどい、つらい、怒ったの意味があるけど、*bitterness*には、にがさ、つらさ、にくしみと意味が少し変わるの面白い。
- ・ *im*がつくだけで、もとの言葉と反対になる単語があることが分かった。*imperfect* ←→ *perfect*

(7) 2022（令和4）年6月：辞書引き学習インタビュー実施

数日間、放課後の時間帯に英語学習に関する能力が比較的高い生徒、中間層、そしてスローラーナーを各クラスから3名ずつピックアップしてインタビューを行った。以下、「辞書引き学習の良いところ」「これからの英語学習でやってみたいこと」に関する生徒のコメントである。

- ・ 自分の知らない単語、逆によく聞くけど意味を詳しく知らないような単語を中心に、楽しみつつ覚えるように辞書引きに取り組みました。
- ・ わからない知識が身についたり、わからない単語

があったら調べたりするのが楽しい。辞書引きは今後につながったり、日常生活でも役立ったりする。

- ・ 授業内で使う時間が設けられていなくても、分からない単語があれば自ら辞書を引くことができました。また、分からないスペルも調べることができました。タブレットでも簡単に調べることができですが、辞書には熟語がのっていたり、例文が載っていたりしてその単語以外の知識もふやすことができるのが辞書引きの良さだと思います。これからはたくさん単語を調べて、ふせんの数を100枚以上にしていきたいです。
- ・ 分からない単語があるときに調べた。授業内で自分の知っている単語を探した。これからはただ調べるだけでなく、しっかりと意味も理解して、覚えたいです。
- ・ 辞書引きはもちろん、授業内での取り組みで使ったり、スペルや意味の分からない単語を調べたりしました。1つの単語に1つの意味だけでなく、複数書かれていて、より理解が深まったり、できたところがよかったと思います。これから、新しい単語との出会いも大切にできるように様々な工夫をしていきたいです。
- ・ 辞書引き学習の良さは、付せんに書くところだと思います。

(8) 2023（令和5）年3月：辞書引き学習についてのインタビュー

辞書引き学習に関する全5項目の質問を、Google Formsを用いて中学2年生164名に実施した。2022（令和4）年8月以降、英語授業内で辞書引きの時間を設定できなかったものの、「3学期になって【辞書引き】を進めていますか？」という質問に対して「はい」と答えた生徒は13名であった。継続して自主的に進めていた生徒の理由については以下の通りである。

- ・ 知っている単語を増やしたい。何となくやりたくなることがあったから。
- ・ 分からない単語がわかるようになるから。
- ・ 知らない英単語が知っているものになるから。
- ・ 自分の知っている英単語の数が少ないから。
- ・ 分からない英単語を調べるため。

- ・自分の知ってる単語が、どのくらい増えているのかわかるし、それが楽しいから。
- ・授業で文を書く時スペルとかが気になったから。
- ・頭に残すため。

また、「辞書引き学習をすることのメリットや役に立つことを教えてください」という質問に対して、以下のコメントがあった。

- ・いろいろな単語に出会え、知ることができる。
- ・意味がわかるし、どんな場面で使えばいいのかまで書いてあること。
- ・単語の読み方やスペルを簡単に調べられる使い方や類語もわかる。
- ・これ一つを持っとけば単語がわかる。
- ・スペルの確認やほかの使い方をしらべられる。
- ・ネットで調べるより、覚えやすい。例文があってわかりやすい。
- ・自分でページをめくって探すことで頭に単語が入ってくる。
- ・単語を覚えることができる、単語に慣れることができる。
- ・単語のスペルだけでなく、読み方や使い方までわかる。
- ・スペルがわかることと、発音が書いてあること例文があること。
- ・分からない単語を調べることができる。こんな言葉ものってるんだ！って辞書引きが楽しくなる。
- ・単語の意味をすぐに理解できて、分からないままにしないことができるし、学習を深めることができる。
- ・自分で辞書を引いて調べることでインターネットや翻訳機能を使う時よりも自分に英単語が身につくところ。
- ・自分の分かっている単語の数がわかる。
- ・ネットで調べるよりも正しく意味が書かれていると思います。
- ・イメージがしやすい。
- ・調べたい単語を探しているときにほかの単語も目に入るからいろいろな情報を得ることができる。
- ・何を調べたかわかる。付箋見ること思い出すことができる。

実践導入期間中、石垣市立I中学校では、コロナ禍において欠席者への対応と相次ぐ学級閉鎖の中、

どう生徒への学習の保証を行うか、限られた授業時数の中での指導計画、1人1台タブレット端末活用が進む中での辞書との併用など、課題は辞書引きを習慣化させるための手立てと時間の確保が課題であったが、辞書引き学習導入の成果として、指導担当者から、①語彙や語句そのものへの関心が高まったこと、②知識が広がることへの喜びを実感させることができたこと、③そしてスローラーナーが取り組める楽しい活動であることを確認し、生徒の英語学習への興味・関心が高めることができたことが挙げられた。

また、「英語を苦手としている生徒、普段無気力な生徒でも、教師に指示されることなく自ら辞書を開き、級友と一緒に単語を探す姿が見られた」「英語の能力以外でも、生徒自身が持っている知識を発揮することができるため、普段英語を苦手としている生徒にも活躍する場を与えることができた」「教師も知らない単語を見つけた生徒の目の輝き！自信につながっているように見えた」との声も寄せられた。

4. 日本の中学校英語科教育における辞書引き学習の実践検証

(1) 研究実践の準備の概要

この日本の中学校英語科教育における辞書引き学習の導入実験と検証のために、導入の事前・事後において英語語彙検定を実施し、実験群（石垣市立I中学校）と統制群（石垣市立O中学校）の平均得点のデータに有意な差があるかどうか検証を行うことにした。統制群については学校規模、学校の置かれている環境、生徒の質が良く似通っている隣接の同市立O中学校に依頼し、実験群（I中学校）に対する統制群（O中学校）として研究に参加することの了承を得た。語彙検定で用いる検定問題は、研究分担者の関山健治が作成した。検定の実施については、Google Formsを用いて行った。なお、検定問題については、以下の通りである。

(2) 語彙検定問題の概要

本研究で用いる語彙検定の作成に際しては、CEFR-JでB1以上のレベルの語(約2600語)のうち、

日本の小中学生向け英和辞典で多く出現するが、英語母語話者の子供向けの英語（英英）辞典では頻度が少ない語（J語彙）と、逆に、英語母語話者向け辞書では頻出するが、日本人向け辞書にはあまり出てこない語（N語彙）、どちらのタイプの辞書でも多く出現する語（JN語彙）を90語選定した。内訳は、A1が30語、A2が34語、B1が26語である。日本における英語教育で重要とされるJ語彙に加え、英語母語話者が最初期の母語（英語）教育で身につけるN語彙を加えることで、日本人の中学生が学校での英語教育で必要とされる語彙に加え、より日常的、実践的な語彙の知識も加味することを目指した。解答は多肢選択式とし、綴りや発音が類似した語（liftに対するrift、thumbに対するsomeなど）や同じ意味カテゴリーに属する語（duckに対するgooseなど）、絵辞典などで近接して扱われているために混同しやすい語（fingerに対するhandなど）などを誤答選択肢（distractor）として選定した。難易度は、中学1年生で90問中50点程度、中学2年生で90問中60点程度、中学3年生で90問中70点程度を想定した。中学1年生から3年生まで、幅広いレベルの学習者が受験することを踏まえ、ランダムに誤答選択肢を提示するのではなく、平易な語であっても正確に理解していないと引っかかってしまう選択肢

表1 本研究で用いた英語語彙検定問題（関山健治作成）例

問題(日本語)	選択肢1	選択肢2	選択肢3
分けあう	share	shake	shine
さまざまな、違った	different	difficult	distant
機械	machine	tool	motor

を設定することで、特に中学3年生の上位レベルの学習者にとっても満点がとりにくい問題にするように配慮した。

この語彙検定を実験群である石垣市立I中学校と、同じ市内にあるI中学校の近隣の公立中学校、O中学校を統制群として、両校に対し同学年、同時期に語彙検定を実施し、それらの得点平均値を統計的に処理することで、その差が有意な差であるのかを明らかにすることとした。

I中学校で、2回検定を受けたのは130名（N = 130）であり、O中学校で、2回検定を受けたのは106名（N = 106）であった。

(3) 日本の中学校英語科教育における辞書引き学習の実践に対する検証

以上の語彙検定を、実験群と統制群に対して実施した。実験群、統制群共に2022年10-11月に語彙検定を実施し、2023年3月に2回目の語彙検定を実験群、統制群共に実施した。統制群は、実験群の近隣の中学校で、学校規模や学力にあまり差のない学校を選択した。

①実験群（石垣市立I中学校）

実験群である石垣市立I中学校では第1学年、計6組の生徒が語彙検定を行った。

平均点は、1回目の最低点は47.18点、最高点は51.87である。2回目の最低点は49.7点、最高点は53.66点である。1回目と2回目の語彙検定結果は表2の通りである。

表2 石垣実験群の語彙検定結果（1回目、2回目）

右値1組	1国	2国	右値2組	1国	2国	右値3組	1国	2国	右値4組	1国	2国	右値5組	1国	2国	右値6組	1国	2国
1102	44	37	1201	48	54	1301	57	66	1401	47	51	1501	55	64	1601	45	53
1103	32	59	1202	49	59	1302	66	58	1402	31	36	1502	76	78	1602	58	60
1104	46	58	1203	57	57	1303	47	50	1403	45	52	1504	44	40	1603	30	46
1105	62	60	1205	59	68	1304	67	69	1404	71	74	1506	40	45	1604	46	46
1106	32	32	1206	60	54	1305	56	54	1405	47	44	1507	30	36	1605	55	45
1107	44	37	1207	56	56	1306	40	58	1406	41	44	1508	42	39	1606	59	65
1108	57	63	1208	37	35	1307	51	50	1407	51	54	1509	43	51	1607	46	55
1109	50	54	1209	61	63	1308	52	52	1409	41	59	1510	51	46	1608	54	58
1110	38	60	1212	41	40	1309	52	60	1410	59	53	1512	37	54	1609	58	64
1111	49	47	1213	42	45	1310	38	36	1411	42	36	1513	39	46	1611	48	62
1112	39	51	1214	59	67	1312	39	42	1412	64	73	1514	66	64	1613	51	43
1113	52	80	1215	76	83	1314	50	59	1413	24	34	1516	44	43	1614	49	53
1114	66	60	1216	41	44	1315	48	60	1414	43	35	1517	67	73	1615	44	47
1115	43	48	1218	47	47	1316	32	35	1415	56	55	1518	54	70	1617	49	42
1116	44	37	1219	73	74	1317	37	41	1416	63	64	1519	43	44	1618	40	40
1117	50	55	1220	40	38	1318	56	66	1417	61	63	1520	51	57	1620	29	39
1120	46	44	1224	50	37	1319	47	52	1419	60	66	1521	55	56	1621	64	53
1121	61	63	1225	56	50	1320	35	45	1420	63	66	1523	50	54	1622	53	54
1122	52	50	1226	47	51	1321	32	28	1421	46	40	1525	55	58	1624	51	56
1123	42	47	1227	43	43	1322	45	37	1422	50	57	1527	36	26	1625	37	45
1124	55	69	1228	73	86	1323	36	42	1423	52	54	1528	49	56	1625	31	44
1125	33	33	1230	28	33	1325	53	59	1424	70	80	1531	35	49	1626	45	29
1126	55	55	1231	44	52	1326	41	47	1425	35	43	平均	47.27	52.22	1628	45	51
1128	46	46	1232	58	52	1328	46	56	1427	34	39				1629	45	38
1129	50	61	平均	51.87	53.66	1329	73	73	1429	50	53				1630	43	53
1130	59	60				1330	47	52	1430	47	60				1631	60	58
1131	53	54				1331	50	62	平均	49.73	53.26				1632	39	43
平均	48.14	52.59				平均	47.88	52.18							平均	47.18	49.7

石垣実験群事前事後 (N=130)

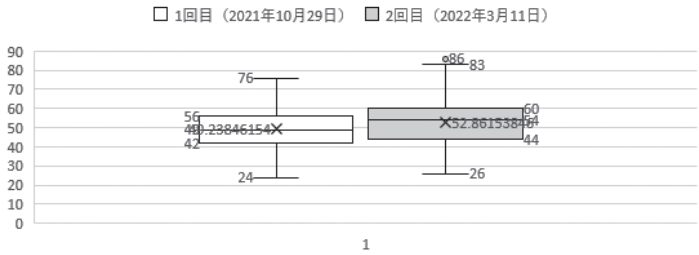


図1 石垣実験群語彙検定 (1回目・2回目) の箱ひげ図

②統制群 (石垣市立O中学校)

統制群の石垣市立O中学校では、第1学年の計4学級が語彙検定を受検した。1回目の最低点は45.03点、最高点は51.16点である。2回目の最低点は43.44点、最高点は50.28点である。これらの全データは以下の通りである。

石垣統制群、実験群共に、事前事後2回の語彙検定で得られた平均値の間に統計的な有意差はなかった。また、石垣統制群と実験群の事前事後2回の語彙検定の間の平均値の差は石垣統制群では、0.87、実験群では、3.62である。(下表参照) また、統制群と実験群の1回目検定の平均点の差は1.74であっ

たのに対し、2回目の検定では4.49であった。2回目の平均の差は1回目の平均の差よりも大きく広がっていることが分かる(表5参照)

以上の統制群と実験群の2回の語彙検定の間の得点差の平均に関して、辞書引き学習を行った実験群が辞書引き学習を行わなかった統制群に比べ、語彙力が有意に伸びたかどうかt検定を実施することを通して統計的な有意差があるかどうかを明らかにした。両群共に、分散は等分散である。その結果、p値(0.05)を下回り、2標本の得点の伸びの平均値の差の間に、統計的に有意差があることが認められた。

表3 石垣統制群の語彙検定結果 (1回目、2回目)

統制群1組	1回目	2回目	統制群3組	1回目	2回目	統制群4組	1回目	2回目	統制群5組	1回目	2回目
1101	56	61	1301	56	46	1401	41	38	1501	27	46
1102	42	44	1303	53	41	1402	54	61	1502	42	45
1103	73	74	1304	59	69	1404	50	53	1503	59	61
1104	54	43	1305	42	54	1405	55	54	1504	57	58
1105	43	60	1306	39	34	1407	43	35	1505	45	49
1105	43	37	1307	47	53	1408	54	53	1506	30	37
1106	62	70	1308	32	31	1409	44	30	1507	64	67
1107	53	49	1309	25	31	1410	50	51	1508	43	28
1109	52	60	1310	47	47	1411	63	56	1509	61	66
1110	59	58	1312	40	39	1412	43	40	1511	45	50
1111	42	32	1316	33	28	1413	61	66	1512	61	64
1112	55	57	1318	59	55	1414	63	70	1513	25	30
1113	47	52	1319	32	33	1415	29	42	1515	38	56
1114	68	74	1320	57	59	1415	82	42	1516	46	46
1115	59	62	1321	46	39	1417	44	48	1517	59	55
1116	30	29	1321	59	39	1418	42	36	1518	39	46
1117	40	61	1322	50	47	1419	42	52	1519	62	62
1118	42	39	1323	44	42	1420	55	55	1520	51	52
1120	53	47	1324	40	33	1421	47	45	1521	44	50
1122	37	38	1325	47	57	1424	60	60	1522	38	49
1124	51	50	1326	33	32	1425	52	52	1524	59	65
1125	44	60	1327	79	34	1427	42	46	1525	40	39
1126	36	34	1328	55	55	1428	52	58	1526	47	43
1127	45	49	1330	43	36	1430	37	29	1527	36	26
1128	30	43	1331	33	52	1431	74	78	1528	32	54
1129	41	54	平均	46	43.44	平均	51.16	50	1529	40	46
1130	26	27							1530	32	48
1131	45	44							1531	39	42
平均	47.42	50.28								45.03	49.39

石垣統制群 (N=106) 事前事後

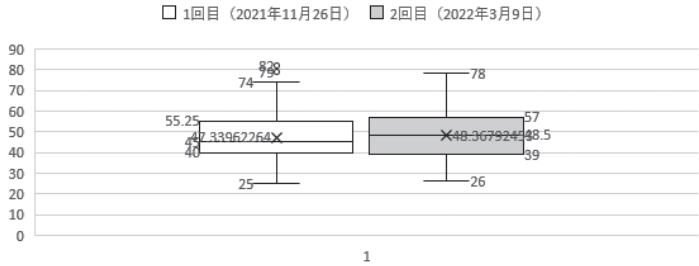


図2 石垣統制群語彙検定 (1回目・2回目) の箱ひげ図

日本の中学校英語科における辞書引き学習実践

表 4 石垣実験群 1 回目と 2 回目の平均値の t 検定

t-検定: 一对の標本による平均の検定ツール		
	石垣実験群1回目 (2021年10月29日)	石垣実験群2回目 (2022年3月11日)
平均	49.23846154	52.86153846
分散	115.6403697	147.3605247
観測数	130	130
ピアソン相関	0.8192112	
仮説平均との差異	0	
自由度	129	
t	-5.894111023	
P(T<=t) 片側	1.54825E-08	
t 境界値 片側	1.656751594	
P(T<=t) 両側	3.0965E-08	
t 境界値 両側	1.978524491	
石垣実験群の1回目と2回目の平均値の間に統計的な有意差はない		

表 5 石垣統制群・実験群の語彙検定 1 回目と 2 回目の平均点とその差

グループ	1 回目平均点	2 回目平均点	差
石垣統制群 (N = 106)	47.5	48.37	0.87
石垣実験群 (N = 130)	49.24	52.86	3.62
差	1.74	4.49	

表 6 石垣統制群 1 回目と 2 回目の語彙検定平均値の t 検定

t-検定: 一对の標本による平均の検定ツール		
	石垣統制群1回目 (2021年11月26日)	石垣統制群2回目 (2022年3月9日)
平均	47.33962264	48.36792453
分散	135.331177	142.8823899
観測数	106	106
ピアソン相関	0.649124324	
仮説平均との差異	0	
自由度	105	
t	-1.071173536	
P(T<=t) 片側	0.143273706	
t 境界値 片側	1.659495383	
P(T<=t) 両側	0.286547412	
t 境界値 両側	1.982815274	
石垣統制群1回目と2回目の平均値の間に統計的に有意な差はない		

辞書引き学習を石垣市立I中学校1年生(実験群)において実践を行うことを計画し、実験群に対し、導入の事前と事後の2回に亘って語彙検定を実施した。また、石垣市立O中学校1年生(統制群)に対しても、実験群が語彙検定を実施する時期に合わせて同検定を行った。O校は、学校規模や学力、地域環境が似通った学校として選ばれた。1回目と2回

目の語彙検定の平均値を、それぞれ実験群と統制群で行ったところ、双方共に、統計的な有意差は確認できなかったが、1回目の検定と2回目の検定の間の統制群の平均値の得点差(伸び)と、実験群の平均値の伸び(得点差)の間でt検定を実施したところ、これら2標本の事前と事後の得点差の平均値の間に統計的に有意な差が認められた。

表 6 石垣統制群と実験群の 1 回目・2 回目間の語彙検定得点の伸びの平均値差の t 検定

t-検定: 等分散を仮定した 2 標本による検定		
	石垣統制群 (O中学校) 1回目検定と2回目検定の得点差平均	石垣実験群 (I中学校) 1回目検定と2回目検定の得点差平均
平均	1.028301887	3.623076923
分散	97.68490566	49.12039356
観測数	106	130
プールされた分散	70.91216181	
仮説平均との差異	0	
自由度	234	
t	-2.354550208	
P(T<=t) 片側	0.009686213	
t 境界値 片側	1.651391475	
P(T<=t) 両側	0.019372426	
t 境界値 両側	1.970153643	

5. おわりに

本稿では、複言語・複文化主義に基づく汎用的な学習モデルを構築するために、日本の中学校の英語教育における辞書引き学習モデルの実践と効果分析を行った。その結果、語彙の理解に対して生徒の知識技能を向上することに関して効果がみられた。辞書を読む、辞書引き学習導入という教育的介入により、生徒の内面にある英語（既知語）と向き合うことで、言語・社会文化的アプローチが可能になり、生徒自身の単語認識が更新され、より洗練された言語推論ができるようになったことを示す生徒の発言が実践記録から数多く見られた。また、辞書引き学習に取り組んだI中学校（実験群）とよく似た教育環境下にあるO中学校（統制群）で英語語彙検定を実施し、統計的分析を行った。その結果、統制群と実験群の2回の語彙検定の間の得点差の平均に関して、辞書引き学習を行った実験群が行わなかった統制群に比べ、語彙力の伸びに有意な差があったことがわかった。

その一方で課題も確認することができた。「辞書は意味を調べるもの」「調べた箇所に付箋を貼ることが辞書引き学習」との認識に囚われている教員や児童が未だいるということである。辞書活用もまた、伝統的な学校文化から自由ではないのである。

本研究は、令和4年度科研費補助金基盤研究B「複言語学習における汎用的な言語間共通学習方略モデルの開発に関する国際比較研究」（課題番号：20H01294）の助成を受けた。

注

- 1) 日本ではCEFRを英語能力の達成度としての共通参照枠にのみ関心がある。日本英語検定協会公式HPでも以下のような説明の仕方になっている。「CEFRとは、Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment（外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠）の略で、複数の言語を対象とした学習、教授、評価のための枠組みとして長年の言語教育の研究成果を基盤にヨーロッパで開発されました。CEFRの中心になっているのが言語達成度を表す共通参照レベルで、A1からC2までの6つのレベルが設定されています。」
「【CEFRとは】<https://www.eiken.or.jp/speakingtest/>（2023年6月13日閲覧）
- 2) 榎本剛士『『英語教育』を更新する』『CEFRの理念と現実:現実編教育現場へのインパクト』くろしお出版、p. 123。
- 3) 今井むつみ、秋田喜美『言語の本質』中公新書、中央公論新社、2023年、p. 193。
なお、図1「ブートストラッピングサイクルモデル（単語理解）」は、同ページを元に深谷が作成。

受付日 2023年9月29日

受理日 2023年10月17日

Abstract

The aim of this study is to practice and analyze the effectiveness of the Jishobiki “Lexplore” model in English language education in Japanese junior high schools in order to construct a generic learning model based on the biliteracy and biculturalism principle in the Common European Framework of Reference for Languages (hereinafter referred to as the CEFR).

In Japan, English education from primary education began in earnest with the revision of the Courses of Study in March 2017. On the other hand, the issues of learners’ motivation and learning strategies for language learning, including Japanese, remain an issue in education, as the acceptance of the CEFR into foreign language education in Japan is biased towards the assessment framework, and It is thought that the issue of crossing and bridging between languages, which is emphasized in the CEFR’s philosophy of bilingualism, is not addressed, and that the focus is only on the level of language competence in each language.

The present study aims to clarify the effectiveness of the ‘lexical dictionary drawing’ model, which is expected to be a generic language learning strategy across countries and languages, in motivating learners to learn vocabulary and learning strategies through a period of practical implementation. In addition, there is a ‘barrier’ that needs to be overcome in order to find the optimum solution to the problem of ‘establishing an autonomous learning model for language learning in bilingual learning’, which is the core concept of the CEFR. That is, the introduction of the learning strategy model must fulfil the aims of the foreign language teachers in their classes. For this reason, it is necessary to experimentally introduce the model in junior high school English language teaching to show whether it is effective for vocabulary understanding. Specifically, an experimental group and a control group will be set up, and a vocabulary test will be conducted and analyzed.

This paper examines the implementation of the generic language learning strategy model as an autonomous learning model in English language education in Japanese junior high schools and its effect on vocabulary development.

Keywords: Lexplore(Jishobiki), English Education, Secondary School, Plurilingualism, Learning Strategies, Autonomus Learning, Vocabulary Tests